NEWS LETTER・HIMEJI CITY MUSEUM OF LITERATURE

手帖 姫路文学館

Vol.140



ことばの森で私をさがす

本がなくなっているというのは、
文学を捨てろということではないのか、
なんとなく、そんな気持ちになった。

「オーディオと人生」『オーディオ巡礼』

作家五味康祐（一九二一～一九八〇）は、大阪の難波に生まれ、興行主として成功した祖父を持ち、「ぼんぼん（お坊ちゃん）」として経済的に豊かな家に育つ。中学三年生にして自分の蓄音機を持ち、レコードをコレクションし、専用の書架が置かれ蔵書が並んでいた。五味の贅沢な暮らしぶりは、友人たちの羨望の的であった。

一九四三年四月、徴用逃れのために明治大学に入学するも時勢がそれを許さず、応召し、中国大陸へと派遣される。大陸で終戦を迎え、南京郊外で捕虜生活を送り、終戦から半年後、復員を果たす。

「完全男」（『暗い金曜日の麻雀』秋田書店所収）には中国から佐世保港に復員した主人公が、大阪まで帰ってくるときの様子が描かれている。列車は原子爆弾が投下された広島を真夜中に過ぎ、東に向かって走る。姫路を過ぎる頃から車窓から見えるのは空襲を受け、廃墟のようになった町の風景だった。やがて列車は大阪に着く。主人公は大阪市天王寺区の我が家を目指し、焼け跡に敷地を探し当てる。

主人公は五味本人に他ならない。大阪が空襲に遭ったことは知っていた。覚悟はしていたものの、家とともに自慢の蔵書も蓄音機もレコードもすべて灰となってしまった。そして冒頭の言葉となる。大切なものを失った五味は、それを再び取り戻そうとは思わず、反対に二度と見たくないという心情になったという。

しかし文学は捨てられず、書かねばという衝動に駆られて書いた原稿は一向に世に認められない。作家になりたい願望と貧しさに苦しむ中、それまで志向した文学を捨て、売れることを意識して執筆した「喪神」で作家として世に出ることとなった。

（杉田陽子）

望景亭雄徳庵（茶室）の軒下から
撮影：島内治彦氏



「わたしのワンピース」1969年 ©西巻茅子／こぐま社

西巻茅子 ララランロロロン すてきなげんがてん

2026年7月4日(土)～9月6日(日)

うさぎが着ている三角形のワンピースは、次々と模様が変わるふしぎなお洋服。西巻茅子さんの代表作「わたしのワンピース」は、着せかえ人形あそびを彷彿とさせるストーリーと、「ララランロロロン」と心が跳ねるようなリズミカルなフレーズが楽しいロングセラーです。

本展では、西巻さんの数ある名作の中から、「わたしのワンピース」のほか、「ボタンのくに」(なかむらしげお 文、こぐま社、一九六七年)「はけたよ はけたよ」(かんざわとしこ 文、偕成社、一九七〇年)「ちいさな きいろい かさ」(もりひさし シナリオ、金の星社、一九七一年)「えのすきなねこさん」(童心社、一九八六年)「ちいさな星の子と山ねこ」(こぐま社、一九八七年)「あいうえおはよう」(こぐま社、二〇〇三年)「ぞうさん」(まど・みちお 詩、こぐま社、二〇一六年)の原画やリトグラフ、刺しゅう、ラフスケッチなどを展示。さらに、ジオラマや映像などで豊かな作品世界をお届けします。

◆子どものアトリエ

西巻さんが絵本作家を志す決定的な契機となったのは、大学卒業後に自ら主宰していた子ども向けの絵画教室〈子どものアトリエ〉での経験だったそうです。そこで目の当たりにしたのは、絵を描こうという気持ちだけで筆をあやつる子どもたちの純粋な姿と、彼らの作品が放つ魅力。自分の心にあるものを迷わずに表現して、生き生きとした絵を見せてくれる様子に、描きたいと思って描くことが一番重要なのだと教えてもらった、と西巻さんは振り返っています。その後、リトグラフ作品で受賞したことをきっかけに、創立して間もないこぐま社との縁を得、絵本づくりへと歩を進めました。

◆絵本づくり

デビュー作「ボタンのくに」は、ボタンを主人公にして西巻さんが描き下ろした何枚かの絵をもとに、中村成夫さんが文章を書いてつくられました。中村さんが追いかけっこのような流れになるようにつなげてゆき、そこにさらに西巻さんがシーンを加えることで完成したといいます。

西巻さんは本作の制作を通じて、絵本づくりの基礎として〈始まりがあって終わりがある〉という作品の一貫性を創り出すことの大切さを学んだと伝えます。



「ボタンのくに」1967年
なかむらしげお 文、にしまきかやこ 絵
こぐま社

絵本は絵の集合体ではない、〈ひとつの作品〉なのだという真摯な気づきは、絵を主体にした絵本づくりを目指す西巻作品における重要な理念となったようです。色彩の統一、登場人物たちの動きや変化の連続性など、多彩なアプローチで絵本作りが試みられていることが明かされています。

◆生み出される名作たち

文章と絵がそれぞれ高め合うような絵本づくりを模索したという「ちいさな きいろい かさ」。本作で著者を記すのに、それぞれ「シナリオ」「イラスト」としたことには、そのような想いが込められているそうです。幾度となくタッグを組むことになる神沢利子さんとの初の共作「はけたよ はけたよ」では、テキストのページ割りにもアイディアを出し、絵とともに子どもを惹きつけることを目指したそうです。そして、洋画家であった父をモチーフに、自由に絵を描く姿を伝えた「えのすきなねこさん」など、西巻さんの代表作は尽きませんが、どの作品も〈子どもたちのために描いている〉という深い愛情に貫かれています。

展覧会場で手づくりされた作品の数々に触れ、子どもたちに寄り添うあたたかくのびやかな世界をぜひお楽しみください。



「ちいさなきいろいかさ」1971年
もりひさし シナリオ、にしまきかやこ イラスト
金の星社



「えのすきなねこさん」1986年
にしまきかやこ さく、童心社

報告

漫画家生活30周年　こうの史代展

鳥がとび、ウサギもはねて、花ゆれて、走ってこけて、長い道のり

前期／4月18日～5月10日
後期／5月13日～6月21日
入場者数：6,070人

昨年5月から各地を巡回中の展覧会。最新作「イメル・フウリ」の原画初公開をはじめ、スタンプラリーやコラボスイーツ「ぼおるぺん古事記セット」、またサプライズ企画も満載の姫路会場ならではの趣向をお楽しみいただきました。漫画原画だけでも500点を超える圧巻の出品総数。会期中にこれだけ大幅な展示替えを行ったのは、当館にとって初めての経験でした。

■こうのさんがライブペインティングをするよ！

4月18日（土）　参加者：398人



歓迎のカリンバ演奏を交えての和やかな開会式で幕を開けた初日の午後、各地の展覧会場で描き進められてきた不死鳥「イメル・フウリ」（約10・5×1・5m）の創作ライブが、大正期の望景亭で行われました。背景の水色と当地ゆかりの花、サギ草が描き加えられる様子を、池の水音や緑風を感じながら見守る心地よい時間が流れました。

その後、当初の予定にはなかった本作の**限定公開（5月10日、6月13日、6月14日）**およびライブペインティング アンコール（6月14日）も実施。最後にスタッフ総出で本作を掲げてのテストフライト？は壮観でした。

■講演「『ぼおるぺん古事記』で読み解く『古事記』の世界」

（第1回姫路文学館友の会研修講座として実施）

講師：兼岡理恵さん（千葉大学大学院人文科学研究院教授）
5月9日（土）　参加者：130人



兼岡理恵さん（左）とこうの史代さん

上代文学の専門家の立場から『ぼおるぺん古事記』を古事記研究史に位置づける新しい注釈書として評価。太安万侶の文字化に際しての苦心の跡を示す一方、こうの史代さんの漫画化における工夫や諸説あるなかで選択された解釈などについて解説されました。講演後は、聴講されていたこうのさんとのミニ対談も。神代篇に続く人代篇の作品化について盛り上がりました。

■『百一』一日会

5月9日（土）　参加者：277人

こうの史代版百人一首1コマ漫画『百一 hyakuichi』の全原画100枚を望景亭の畳に並べて見せるという、一日限りの大胆な試み。来場者は、しずしずと歩みを進めながら、作品と元の歌とを見比べてはその奇想天外なアレンジを楽しみました。



『百一』一日会

■映画「夕凪の街 桜の国」上映会

5月24日（日）　2回上映
参加者：計135人

佐々部清監督、田中麗奈・麻生久美子主演による2007年の映画。じつはこうのさんがエキストラで出演されているのも見どころの一つ。本展監修者・小説家福永信さん書下ろしの充実した解説資料も好評でした。

■講演「『空色心経』の舞台「般若心経」のこころに触れる」

講師：大樹玄承さん（書寫山圓教寺 第百四十一世長吏）
6月13日（土）　参加者：100人



大樹玄承さん

われわれは、苦しい時を生き抜いて彼岸を目指すという修行を投げ出してはいけない。さとりを開く精髄をわずか300字弱で表す般若波羅蜜多心経（般若心経）。まずはこれを持つところから、読む、そしてその難解な言葉の理解へと段階を踏んでゆけばよい。『空色心経』はその一助となる、と語られました。

■こうのさんがおしゃべりするよ！

6月14日（日）　参加者：300人

福永信さんの進行で、大作「イメル・フウリ」の各地でのライブペインティングの変遷や、連載一年を迎えた宇宙人漫画「かぐやサン」、今年3月から連載が始まった漫画「イメル・フウリ」について語られました。東日本大震災後の被災地のスケッチを収めた『日の鳥』に連なる「イメル・フウリ」は、まさに今回の巡回展によって取り組む勇気を吹き込まれたのだとか。



こうの史代さん（左）と福永信さん

質問コーナーでは、漫画家を目指して書きたいものと売れるものとの間で悩む参加者に対し、「重要なのはテーマ。この作品が存在すると誰かの助けになれるか、自分がなぜそれを書きたいと思ったか、といった根底を見極めるのが大事かも」と回答。一つ一つの問いかけに真摯に向き合われる姿が印象的でした。

「私は漫画を描く手を持っている」――こうの史代さんの言葉です。漫画がまだ足を踏み入れていない場所を探し、漫画だからこそできる表現を担う。そんな飽くなき冒険心としなやかな使命感にあらためて触れた展覧会でした。

（甲斐史子）

学芸員メモ

飾磨（しかま）の有本芳水詩碑と郷土史家高橋秀吉

甲斐　史子

大正時代、自身が編集する雑誌「日本少年」（実業之日本社）に七五調の甘美な詩を綴り、子どもたちの絶大な人気を博した詩人有本芳水（明治19年～昭和51年／1986～1976）。初めての詩集『芳水詩集』（大正3年3月　実業之日本社）は、竹久夢二の装幀も相まって空前のベストセラーとなった。

芳水の生家跡（姫路市飾磨区玉地）にほど近い恵美酒宮天満神社の門前に、じつに印象的な灯台型の詩碑が建つ。「播磨はわれの父の国／播磨はわれの母の国／飾磨の海にともる灯の／その色みれば泪ながるゝ」。第三詩集『ふる郷』（大正7年3月）所収「播磨より」の第二節と、第二詩集『旅人』所収「ふるさとの海」第三節の中のそれぞれ二行を採って組み合わせた芳水の書が刻まれる。背面には「有本芳水先生叙勲長寿祝賀会／昭和四十一年十月吉日建之」とある。今からちょうど六十年前。芳水は、前年に勲四等瑞宝章を受章し、当年は八十歳を迎えていた。

建立の立役者は、市内在住の郷土史家高橋秀吉（明治32年～昭和59年／1899～1984）。生涯をかけて当地の主に近現代史を市井の人の眼で調べて記録し、『明治の姫路百景』『姫路の五十年』『姫路の罹災』などに著すとともに、古写真をはじめとする膨大なコレクションを残した人物である。父の高橋金治（号・鷺城）が明治34年から大正8年まで経営した「鷺城新聞」の文芸欄「鷺城文壇」では、当時十代の芳水や三木露風ら播磨の文学青年たちが投稿を競ったというゆかりを持つ。

少年時代に芳水詩を愛誦した高橋は、戦後、疎開させていた荷物から無事に『芳水詩集』を見つけ出した際、喜びの余り「焼跡の庭に立ったまゝ全ページを繰って喰い入って読んだ」という。そんな高橋が夢にまで見た芳水との対面を果たしたのは、おそらく昭和34年9月のことであったと思われる（昭和34年10月31日付芳水宛書簡　※以下すべて芳水宛・当館蔵）。以来、さかんに手紙を書き送り、芳水が帰郷の際には姫路駅近くの南畝町（のうねまち）の自宅に招き入れては、地元の愛好者たちとの交流を取り持った。

当時、芳水は再ブレイクのさなかにあった。きっかけは、同じく芳水ファンであった岡山県知事三木行治（明治36年～昭和39年／1903～1964）が雑誌「文藝春秋」に寄せた随筆である。芳水は大正7年に「日本少年」から経済雑誌「実業之日本」に異動し子どもたちの前から姿を消すと、取締役を経て昭和16年に定年退職。妻の郷里の岡山県上道郡浮田村北方（現・岡山市東区）に疎開したのちは、ここを終の棲家と定め、県内の大学や高校で文学の講座を受け持っていた。偶然にもそのことを知った三木は歓喜し、「いつの日にか、県下の春日うららかな丘の上に、芳水歌碑を建立したいというのが、私の年来の夢である」と吐露したのである（「壁にむかっての独り言」／「文藝春秋」昭和32年6月）。

これがかつての少年少女たちの記憶を一気によみがえらせ、さらには三木の働きかけで『芳水詩集』が復刊されたことから（昭和35年9月）、全国の有名無名の発起人、じつに千五百人を擁する建立計画が加速する（三木行治「コップの中のそよ風」／「文藝春秋」昭和35年11月）。この動きに高橋が羨望を抱かなかったはずはない。「当方もかねがね是非先生の詩碑をと志しています」（昭和35年5月31日）、「私一生の希いとして、当地にもぜひ先生の詩碑を建てて当地御出生を天下に誇りたく存じています」（昭和36年3月22日）と熱心に呼びかけ、自身が事務局を務める姫路文化協会の齋木亀治郎会長（山陽色素社長）との面会を繰り返し要請した（昭和36年4月4日および25日）。しかし捗々しくはなかったようだ。同様の申し出が各地から殺到し、芳水も困惑していたのだろう。

昭和36年5月、岡山市後楽園外苑に『芳水詩集』の一篇「小とりよ」の詩碑が建てられた。七十五歳の芳水を迎えての盛大な除幕式には高橋も出席し、三木に指名され乾杯の音頭をとる大役を果たした。同郷の高橋に対する三木の配慮であった。席上、姫路出身の作家阿部知二が「芳水詩碑は生まれ故郷にも建てるべきだ」と語ったことで、高橋はあらためて悲願の達成を期したという。

その後も、「先生のごけんそんな心境で」（昭和39年9月18日）、「あるいは先生の御心にそむくかも知れませんが」（同年10月29日）といった具合で、いつの時点で芳水が承諾したのかは不明だが、最終的には投稿時代の自身がよすがとした「鷺城新聞」の社主、高橋の父金治への恩返しの想いが決め手となった。すでに多くの賛同者が集まり、阿部知二、桂米朝、旭堂南陵、清水公照、寿岳文章、中村雁治郎、安田青風ら著名人も名を連ねた。

場所について高橋は、手柄山の市立図書館（現在は本町に移転）付近を提案し（昭和36年9月30日）、また芳水の生家も候補にしていたようだが、「永遠に変らぬ氏神社の境内の一隅にでもして下されば」との芳水の意向で現在の位置に定まったという。懐郷の詩句から選定した碑文にインスピレーションを受けた高橋は、かつて飾磨の海を見守った木造洋式の緑灯台（港に向かって左側を示す目印として、緑の光を放つ）をかたどり、これを灯せばお宮の灯籠にもなる、という見事なアイデアにたどり着いたのだった。

芳水は、これを最後に建碑は断るつもりであったが、生前だけでも計七基が建てられた。人々は、高度経済成長のうねりのなかで手放してきた甘やかな記憶を芳水の詩に探ろうとしていたのかもしれない。この冬、生誕百四十年没後五十年を記念した有本芳水展を開催する。本展では、各地の碑に秘められた物語にも注目したいと考えている。

【参考】「有本芳水先生長寿祝賀詩碑建設趣意書」（昭和40年・推定　有本芳水会）



有本芳水詩碑（姫路市飾磨区恵美酒）

学芸員メモ

『地志播磨鑑』乾本の寄贈

徳重　公美

令和八年（二〇二六）二月、『播磨国風土記』『峯相記』と並ぶ「播磨三史書」のひとつ『地志播磨鑑』（乾本・十一冊）が当館に寄贈された。当資料は、著者である平野庸脩の自筆稿本で、現存する二種のうちの一つである。本稿ではその書誌情報をまとめながら、寄贈資料の紹介としたい。



『地志播磨鑑』乾本
題箋には「鑑」の一部がわずかに残る

『地志播磨鑑』（以後『播磨鑑』）は、江戸時代、印南郡平津村（現加古川市米田町）の医師で暦算家であった平野庸脩が四十年以上をかけてまとめ上げた大著である。宝暦十二年（一七六二）頃に完成した。内容は、飾東・飾西・明石・加古・印南・三木・加東・加西・多可・神東・神西・宍粟・佐用・揖東・揖西・赤穂の十六郡にわたって歴史を記し、各郡別に、神社・寺院・名所旧跡・和歌・古城跡、さらに人物、土産、巷説、異聞まで、播磨国に関して蒐集された情報を整理して土地の案内としたもので、まさに、江戸時代に更新して著された「風土記」と言えよう。執筆において参照された本は多く、『播磨国風土記』『峯相記』はもちろんのこと、『万葉集』『古今集』『源氏物語』『三代実録』『延喜式』『太閤記』、さらに『論語』『孟子』『垂加文集』まで、地誌・文学・歴史書のほか幅広い書物が援用されている。また、口碑伝承も重要な土地の歴史として採られており、晩年まで改稿を続けた庸脩は、友人たちの助けを得ながらその蒐集を達成した。そうして果たされた網羅ぶりは、橋本政次が「渉猟捜訪至らざるなし」（『地志播磨鑑』播磨史籍刊行会、昭和三十三年）と評するとおりである。

『播磨鑑』は完成後、序跋を加えて時の姫路藩主酒井忠恭に献上された。その時期は明和二年（一七六五）頃と考えられている。本書は、この〈献上本〉のほかに数種の写本（流布本）があり、それによって江戸時代以降、読み継がれてきた。

さて、このたび当館所蔵となった『播磨鑑』の自筆本は、谷川家（加東市）に保存されていた草稿本（十八冊あったうち五冊が残る）とは別に、乾家（加古川市）に伝わっていたものである。昭和三十三年に本書の存在が明らかとなり、それぞれ〈谷川本〉〈乾本〉と区別する。

乾本は、飾東郡二冊・飾西郡一冊・明石郡一冊・印南郡二冊・加東郡一冊・加西郡多可郡一冊・神東郡神西郡一冊・宍粟郡佐用郡一冊・赤穂郡一冊の、計十一冊が残っており、序跋のある「首巻」と、加古・三木・揖東・揖西の巻、そして本記から漏れたものを収める「附録」を欠く。乾本の発見に立ち会った橋本の調査によれば、谷川本が書かれた後に、「おそらく上梓するためか、または他の閲覧に供するために、著者の手で谷川本から書き写したものであろう」（前掲書）とする。谷川本に「草稿」と明記されていることや、乾本にはわずかに「播磨鑑」の題箋が残るが、谷川本には「播磨鑑」以前に検討されていた書名「播磨名所集録」の語句が見えることなどが、その大きな理由とされた。ちなみに、書名は検討が繰り返されたようである。当初「播磨国神社仏閣名所旧跡竝和歌附古城蹟」との仮題が立てられ、その後、「増補播磨国名所旧跡誌」に、そして「播陽名所集録」「播州志」「播州記」「玉林耕車」などの名が検討されていたことが献上本および稿本から明らかである。

乾家に自筆稿本が伝わっている経緯について橋本は、当時庄屋であった乾家に庸脩が出版費をたすけてもらい、その代償として稿本を置いたのではないか、との考えを寄せている（神戸新聞東播版・昭和三十三年四月十六日）。そして、乾本の書写後、庸脩の手許には谷川本が置かれ、新たな発見や考証、調査の深まりに従って増補された。酒井忠恭の死去についての補筆などが見られることから、そのように推測される。

寄贈者は、橋本に調査を依頼し、乾本の発見に寄与した乾家二十七代当主乾治坤氏（一九〇七～一九八五）の次女池野まき子氏である。病弱であった幼い頃から同家の屋根裏にある古い本をよく読んでいたが、この自筆稿本は長持に保管され、父上からは、これは個人が持っておくべきものではなくいずれ公にお返しするように、と言われていたという。池野氏は、同家の一員として長年この自筆稿本を大切に保管されてこられたが、資料の価値を鑑み、当館へのご寄贈を決断されたと伺った。文化財の未来への継承を担ってくださったことに感謝を伝えるとともに、本稿を、所蔵場所の推移の記録としたい。

「姫路文学館紀要 28号」を発行

巻頭には、昨年8月に開催した第27回司馬遼太郎メモリアル・デーより、司馬遼太郎記念館館長の上村洋行氏のお話と、作家澤田瞳子氏の講演「歴史小説とは何か」を収録。続いて、「没後十年 作家 車谷長吉展」開幕記念行事として開催した、高橋順子氏（詩人）と前田速夫氏（元「新潮」編集長）による対談「私だけが知っている車谷長吉」のすべての内容を掲載しています。

さらに、令和3年度企画展「絵本作家 長谷川集平の仕事展―絵本デビュー46年のキープ・オン・ロッキン！」の記録を担当学芸員・甲斐史子が執筆。多数のカラー図版も掲載しながら展覧会の内容を豊かに補い、今年デビュー五十周年を迎えた長谷川氏の歩みをまとめました。

一冊八〇〇円、姫路文学館にて販売しています。

いしぶみ物語

一岸上大作歌碑

「かがまりてこんろに赤き火をおこす母と二人の夢作るため」

（兵庫県神崎郡福崎町福田234-1　兵庫県立播磨福崎高等学校）



歌人岸上大作（神崎郡福崎町出身　一九三九～一九六〇）にとって、高校進学は大きな転機となった。

中学校二年生の夏以降、本格的に日記をつけはじめ、母に読まれないように恐ろしく細かい文字で、初恋に揺れる心や、父を戦争で失った家庭内で祖父と母が諍うさまなどを仔細に書き残すようになった。岸上の文章力はこの日記によって、驚くべき早さで進化した。しかし、当時の彼が読んでいたのはおおよそ新聞くらいで、社会や政治には興味を持っていたものの、いまだ文学というものに触れられる環境ではなかった。

昭和三十年（一九五五）四月、福崎高等学校入学と同時に文芸部に入部した岸上は、顧問や友人らに導かれ、当時、寺山修司の登場で若者の注目を集めていた短歌に出会った。十五歳の少年は、その表現方法に無限の可能性を感じるとともに、そこに自らの光り輝く未来を見出した。

生来の内気さとは裏腹に、彼の行動は果敢でそして性急であった。七月には、東京の結社誌「まひる野」（窪田空穂主宰・窪田章一郎編集）に入会、また雑誌「高校時代」などに投稿を開始し、十二月には初入選を果たした。当時の日記には、初入選にして早くも「高校歌壇にその人ありと云われる位な位置」を残された二年間で作らねば、と強い上昇志向を滲ませる。実際、岸上は、投稿欄の常連に加わっていった。

かがまりてこんろに赤き火をおこす母と二人の夢作るため

平成六年（一九九四）、福崎高等学校八十周年を記念して、中庭に建立された歌碑に刻まれたこの歌は、岸上が受験勉強に励んでいた昭和三十三年（一九五八）一月に詠んだ、高校時代最後の一首である。東京に進学する夢を捨てられず、ようやく奨学金受給の目途が立った頃の将来への希望に満ちた歌だ。「高校時代」で土岐善麿の特選となり、岸上の没後四半世紀を経て、旺文社の教科書にも採用された。

ひたすらに生き急ぎ、二十一歳で果てた岸上大作。短歌史に名を刻みたいという若き日の野望はたしかに果たされたが、短歌と運命的に出会った場所に、高校時代の集大成ともいえる希望の歌が刻まれたいしぶみが佇む―そんな未来は、さすがの岸上も想像していなかっただろう。

（竹廣裕子）

■アクセス

JR福崎駅より北西へ徒歩約5分

おすすめの一冊

作者たなかしんは、兵庫県明石市在住の画家・絵本作家である。日本より早く台湾で絵本作家デビューを果たし、昨年は活動20周年を記念した特別展「そうぞうのかけら―砂で紡ぐたなかしんの物語」が明石市立文化博物館で開催された。明石の海岸で採れる砂を下地に使って描く技法で独特の趣を放ち、幻想的でありながら温かみを感じる絵となっている。

本作は、2019年1月に毎日新聞に連載され、加筆後出版された児童文学で、第53回日本児童文学者協会新人賞を受賞した。また、朗読劇として度々上演されている作品でもある。

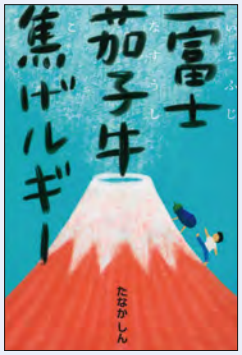
中学3年生のぼくは、おとんと二人暮らし。おとんが初夢で茄子牛に乗って富士山に行き、「餅が焦げへんようにしてください」とお願いをした。すると本当に日本中の餅が焦げなくなった。富士山はもう一つ願い事を叶えてくれるという。おとんから願い事を託されたぼくは――。

物語は関西弁（作者は大阪出身）のコミカルなボケとツッコミで進み、読んでいて思わず吹き出してしまいそうになる。

話が進むにつれて、ぼくとおとん、それぞれが抱えた心の傷が明らかにされる。

ぼくが小学校6年生の正月に、おかんは飲酒運転の車にはねられて死んでしまう。よくわからない間にお通夜もお葬式も終わり、二人とも一度も泣かなかった。

中学校入学式の日、おとんとおかんの話をして初めて二人で泣いた。おかんが亡くなってから誰とも話していなかったぼくは、友達の作り方がわからなくなってしまう。3年生になってケンという友達ができ、ぼくはクラスに馴染んでいく。



たなかしん著
『一富士茄子牛焦げルギー』
（2019.11.30刊　BL出版）

2学期の終わり、ケンは急に引っ越すことになった。両親が離婚し、母親に引き取られるという。いつも無邪気に笑うケンを見て、幸せだと思っていたけれど本当は違った。ケンは「ほんじゃまたな！」と消えて行った。

ぼくの願い事は一つ、「おかんを生き返らせて欲しい」。おとんは「それはあかん」と言う。おとんはおかんの死に納得できず、おかんを轢いた相手の居場所をつきとめ、復讐しようと車で待ち伏せした秘密を打ち明ける。「復讐なんてしても誰も幸せにならん」、「おかんのあの笑顔は、あほなことしなさんなって笑い顔や」。

ぼくは、夢の中でおかんと出会い、おかんの死を受け入れる。おかんを失った悲しみは消えることがない。それでも、ぼくとおとんの人生は続いていく。「恥ずかしない生き方しよな」と言う二人。

茄子牛、焦げルギーの正体は、ここでは明かさないが、その発想が突拍子もなく面白い。ぼくとおとん、おかん、ケンとのやりとりに笑ったり涙したりしながら、最後は笑いでオチがつく。

家族の突然の死をどう受け入れ、どう乗り越えていくのか。「ゆっくりでもいいから光を探して欲しいのです」と、あとがきの中で作者は言う。

大人にこそ読んで欲しい一冊だ。

（杉田陽子）

報告

第五回 藤原正彦 姫路文学館長講演会

6月7日（日） 姫路文学館講堂
参加者：300人

我が国のオピニオンリーダーの一人である藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が、現在の日本社会、文化について語る講演会。今回のテーマは「これからが、これまでを決める」。

藤原館長は、人間は暗いものに惹かれやすいとして、井伏鱒二の言葉「さよならだけが人生だ」を例示。日本人は別れというものの本質や、その趣深さを知っているとし、さらにこの言葉を楽観的に転じて「思い出だけが人生だ」と提唱。これまでの挫折や失意、恥などはその人の一部で、輝かしい財産であるとし、これからの生き方によってそれらを肯定していくことが重要であると、館長自身の経験を交えながら力説しました。

トライやる・ウィーク

6月2日（火）～5日（金）

市立中学校2年生による職業体験「トライやる・ウィーク」を実施しました。

今年は、城乾中学校、山陽中学校から3名の生徒を受け入れました。資料の取り扱い、受付業務、清掃業務などを体験したほか、発送物の宛名シール貼りや、ボランティアと一緒に特別展「西巻茅子ララランロロロン すてきなげんがてん」の発送作業にも従事しました。

また、4日間を通じて、南館2階の図書室に設置する「おすすめ本」のパネル作成に挑戦しました。キャッチコピーや本文を考え、イラストを描いたりと力作揃いとなりました。

生徒たちが作成したパネルは、8月30日まで図書室に設置しています。


発送作業

友の会だより

■2025年度友の会総会（5月27日）

参加者：60人


総会

第一部は、令和7年度事業・決算報告、役員の選任、令和8年度の事業・予算案、会則の変更について承認されました。

第二部は、伊藤典芳さん（メゾソプラノ）、中村詞文さん（バリトン）、久保貴子さん（ピアノ）による「アーリーサマーコンサート」を開催。唱歌、映画音楽、抒情歌、Jポップと、幅広いジャンルの歌を披露してくださいました。歌詞の手話を教えていただき会場全員で手話をしながら歌う場面もあり、なごやかな初夏のひとときとなりました。


コンサート

■友の会研修講座

▽第2回 11月15日（日）
「帝国の書店 書物が編んだ近代日本の知のネットワーク」（仮題）
講師：日比嘉高氏（名古屋大学大学院人文研究科教授・第38回和辻哲郎文化賞一般部門受賞者）

▼申し込み不要です。
会場 姫路文学館 講堂
時間 午後1時30分～3時
受講料 友の会会員は無料、非会員は500円

文学館日誌抄

（令和8年3月16日～6月15日）

3月11日 兵庫県立歴史博物館運営懇話会に甲斐史子副館長が出席。
3月12日 姫路お城のアンバサダーが研修のため来館。
3月14日 有本芳水賞授賞式（於姫路信用金庫本店）に甲斐史子副館長が出席。
3月18日 全国文学館協議会の展示に関する共同討議に甲斐史子副館長が出席。
3月19日 消防訓練を実施。
姫路文学館友の会ボランティア総会・交流会を実施。
姫路市立広嶺中学校1年生が班別学習で来館。
3月20日 兵庫県立歴史博物館（博物館ボランティアコーディネーター養成セミナー）に甲斐史子副館長が出講「〝双方向〟の関係づくりを目指して―姫路文学館ボランティアの場合」。
3月24日 私立広島学院中学校1年生の生徒が見学のため来館。
4月18日 特別展「漫画家生活30周年 こうの史代展」（以下「こうの展」）開幕。
4月25日 建築学生対象バックヤード見学ツアー企画で兵庫県立大学人間学部学生に見学会実施。案内は鎌谷弘美総務課長。
4月28日 姫路信用金庫新人研修で来館。
5月6日 姫路市立城東公民館、同野里公民館教養講座が「こうの展」見学のため来館。
5月16日 神戸学院大学学芸員課程に甲斐史子副館長が出講「文学館とは何か―その特性と可能性」。
5月17日（国際博物館の日）に参加。常設展を無料開放し、クイズラリーを開催。
5月20日 私立開明高校1年生が校外学習で来館。
5月21日 姫路市立東公民館教養講座が「こうの展」見学のため来館。
6月12日 姫路市立城乾公民館教養講座が「こうの展」見学のため来館。

播磨の文学界

■季刊誌「バンカル」が一三九号を最後に休刊し、三十五年の歴史に幕。3月31日
■井上通泰の書簡などの資料六点が、中塚廣重氏により神崎郡福崎町に寄贈。4月
■たつの市立龍野図書館が『創立百年記念誌～龍野図書館の思い出～』刊行。4月6日

寄贈者一覧

（令和8年3月11日～6月10日）

左記の方々より資料の寄贈を受けました。
（五十音順 敬称略）

有本倶子　映像産業振興機構　大谷司郎
岡田清治　尾崎美紀　加西市文芸協会　季村敏夫　久里順子　近藤健史　高島愼助
武内順子　武内成美　高橋順子　長福香菜
東海晴美　夏石番矢　日本国際フォーラム
林裕美子　牧田榮子　宮本久雄　森鷗外記念館　柳辰哉　山田英子　山田佳乃　山野博史　山本淑美

このほかにもたくさんの方々から資料を頂戴いたしました。誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

TOPICS

NEWS LETTER vol.140

おしらせ　第12回 藤原正彦エッセイコンクール　作品募集中！

本賞は知的なユーモアと明晰な論理性を備えた数々のエッセイで、多くの愛読者を持つ藤原正彦館長が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるために創設したエッセイコンクールです。
「生きることとは創ること」――藤原館長の言葉です。
自分を見つめ考えたことを文章にしてみてください。

●概　要　対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙５枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。
※応募規定の詳細や過去の受賞作は、姫路文学館ホームページでご覧いただけます。

●審査員　藤原正彦姫路文学館長
●発　表　令和８年12月下旬
●表彰式　令和９年１月17日（日）

予告　特別展　やなせたかし展　人生はよろこばせごっこ

■会　期：2026年9月19日（土）～11月23日（月・祝）

アンパンマンの生みの親・やなせたかし（1919-2013）の初の大規模巡回展として全国各地で大好評を博している展覧会が、この秋、姫路文学館にやって来ます。

漫画家、詩人、絵本作家、イラストレーター、デザイナー、編集者など多彩な活動を繰り広げたやなせは、極上のエンターテイナーでもあります。彼は「人を喜ばせること」を、人生最大の喜びとしていました。

苛酷な戦争体験、家族との別れ、様々な人との出会いに揉まれ、「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」を自分に問い続けたやなせが辿り着いたのは、かっこ悪くても、本当に困っている人に一片のパンを、「あんぱん」を与えられるヒーロー像です。

本展は、2026 年にやなせたかし記念館アンパンマンミュージアムが 30 周年を迎えたことを記念し、原画 約 200 点を中心に、「やなせたかし大解剖」「漫画」「詩」「絵本／やなせメルヘン」「アンパンマン」「人生はよろこばせごっこ」のテーマで作品を紐解きます。私たちに勇気を与え続けるやなせさんの作品世界を存分にご堪能下さい。

当館が巡回展のトリを飾る最終会場となります。どうぞお見逃しなく！



写真提供：(公財) やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団



「やなせうさぎとアンパンマン」（部分）
制作年不明



『やさしいライオン』1975年

©やなせたかし　(公財) やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団蔵

利用案内

■開館時間　午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
■休 館 日　毎週月曜日(休日は開館)
休日の翌日(土日の場合は開館)
■入 館 料　450円　南館は無料
※18歳未満(18歳の誕生日から最初の3月31日までにあるものを含む)の観覧料は無料です。
(年齢がわかるものをご提示いただく場合があります。)
※特別展は別料金となります。※30名以上の団体は2割引

■交通機関
JR・山陽電鉄姫路駅より神姫バスターミナル9、10、17、18番のりば（一部停車しない系統があります。ご確認ください）乗車6分
「市之橋文学館前」下車、北へ徒歩4分
6番のりばで城周辺観光ループバス乗車10分
「清水橋（文学館前）」下車、西へ徒歩3分



姫 路 文 学 館

手帖 姫路文学館　第140号
（平成3年7月1日創刊）
令和８年（2026年）７月１日発行
編集・発行　姫路文学館
〒670-0021　姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228
FAX (079) 298-2533
e-mail/kyo-bungaku@city.himeji.lg.jp
http://www.himejibungakukan.jp/